

「復興教育」を再考する

佐々木 力也

要 旨

東日本大震災津波発災から、今年で11年目を迎える。これまでの11年間の復興教育を振り返り、改めていわての復興教育の「ひとづくり」という理念を確認する必要がある。加えて、新たな視点も取り入れ、今後の防災教育や復興教育の在り方を考えていくことは大きな意義を持つであろう。

田老第一中学校での復興教育を振り返ってみたい。そして、新たな角度から、田老で実践した活動の教育的価値を再考する。参考としたものは、岡潔（数学者）のことは「渋柿」「甘柿」「つぎ木」である。

また、津波体験作文集「いのち」の中にあることばの中に、救済という働きが存在するのではないかと、この提案をする。その際、池田晶子（哲学者）や若松英輔（批評家、随筆家、大学教授）のことは引き合いに出したい。ことは（言葉、詞）は生きて働く力を持ち、人生を変える力を持っていると思う。これからの学校教育や復興教育の在り方を考えていく時に、ことばの大切さを認識しながら推進していきたいものだ。

キーワード：復興教育、「渋柿」「つぎ木」「甘柿」、ことば（言葉、詞）、救済、校歌

1. はじめに

2021年、災害文化研究第5号で、『「あの日、あの時」と「これから」』と題した論説を発表した。その後、11月7日には、釜石市で開催された「2021 ぼうさいこくたい」で、発表者の一員となり口頭発表する好機を得た。どちらの機会でも、震災当日の体験並びにその後の宮古市立田老一中学校での復興教育について発表することができた。この研究レポートは、これまでの発表内容を部分的に取りあげながら、改めて田老一中での復興教育についての意義や価値について、自分なりに深掘りしまとめたものである。

特に、復興教育を「渋柿」から「甘柿」へ繋ぐ「つぎ木」ととらえ、教育上の価値について再考する。

また、復興教育の一つである津波体験作文集「いのち」に綴られたことばに込められた子ども達の心情に寄り添い、復興教育における子ども達の本当の成長や人間形成とは何かを共に考える機会としたい。

2. 復興教育とはなにか

「いわての復興教育」の定義を確認する。また、成長や人間形成という観点から、岡潔（数学者）の

ことは引用し、復興教育の価値や位置付けについて提案する。

2.1 いわての復興教育とは何か

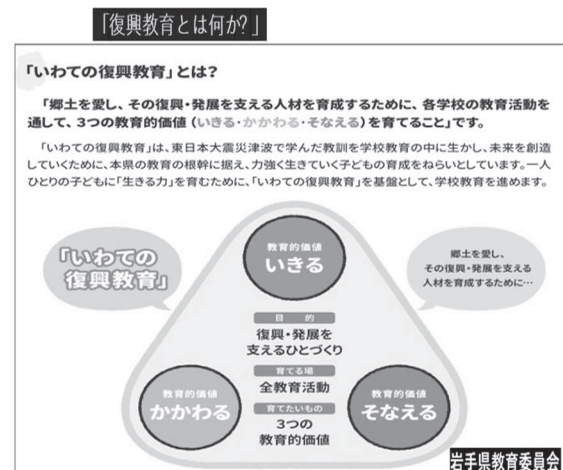


写真1 いわての復興教育とは(岩手県教育委員会)

岩手県教育委員会は、いわての復興教育を「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てることです。」と定義している。

2.2 田老一中の復興教育

いわての復興教育の目的は「人づくり」である。そして、その復興教育の基本的な考えを基に、田老一中では、平成23年度から田老や岩手の復興に寄与できる人材育成を大きなねがいとし、数多くの復興教育活動を実践してきている。

災害文化研究第5号や2021 ぼうさいこくたいでは、復興教育の事例として、津波体験作文集「いのち」の作成、災害廃棄物破碎・選別作業見学、交流活動「語り部」となったの伝承活動、宮古市立連合音楽会の参加、震災資料展示室（ボイジャー）の設置などについて紹介した。

2.3 岡潔のことば

教育委員会で勤務していた時代、門外漢ではあるが、道徳の授業を参観し助言する機会があった。モラルジレンマを扱った葛藤資料を扱った授業に対し助言する時、岡潔（数学者）の『春宵十話』の中にあることばを引用しながら述べた経験がある。

岡のことばは、復興教育の教育的価値や位置づけについても大きな示唆を与えるものだと感じている。下記にそのことばを紹介し考察を加える。

「人は動物だが、単なる動物ではなく、渋柿の台木に甘柿の芽をついだようなもの、つまり動物性の台木に人間性の芽をつぎ木したものだといえる。（中略）ただ育てるだけなら渋柿の芽になってしまって甘柿の芽の発育はおさえられてしまう。渋柿の芽は甘柿の芽よりずっと早く成長するから、成熟が早くなるということに対してもっと警戒せねばいけない。」

2.4 渋柿、甘柿、つぎ木とは何か

岡は、渋柿を甘柿に成長させるためには、つぎ木が大切な存在となる、ということを述べている。筆者の拡大解釈となるが、このことばを次のように捉えたい。

「人を育てることは、渋柿（土台）に甘柿をつ

ぎ木するようなものである」ということだ。また、柿の成長を人の成長ととらえれば、「人生は、渋柿（土台）の上に甘柿をつぎ木したようなものである」ということになる。

渋柿→つぎ木→甘柿までの過程を、人の成長や人間形成までの長い行程と捉えたい。

人生における「渋柿」とは、言わずもがな苦しみや悲しみに直面することであり、不安や恐れ、苦渋、苦難などの感情的な苦悩や心理的苦痛につながる様相を持つ。それらの内容に類似することばには枚挙に暇はないが、渋柿に含まれるイメージは容易に理解することができるはずだ。

津波体験作文集「いのち」には、数多くの渋柿にあたる表現が存在する。以下に紹介したい。「姉と母は逃げようとしたものの間に合わず、亡くなってしまったのです。」「母は、遺体で見つかった。」「田老の町がこんなことに……。とても衝撃的な光景でした。」「津波は、たいせつなものをうばっていきました。」「家が全壊でした。」「本当に怖かったです。」

これらは、肉親が亡くなったこと、田老の町や自宅が損壊したこと、大切な人やものや住み慣れた町の消失、その時の気持ちを表現している。そして、全ての内容は文章の長短に相違はあるものの、人生の「渋柿」を表現したものだ。

一方、「甘柿」に関して、そのイメージする表現も作文集「いのち」に見いだされる。次のようなものである。「復興のためにできることをやっていきたいと思います。」「夢は、早く田老を復興して、活気に溢れる町にすることです。」「家族に感謝し、支援してくれた人々への感謝もわすれずに生きていきたいと思っている。」「教訓を後世に伝えて、自然災害に負けない田老にしていきたい。」「自分も、雑草のように強く生きていきたい。」「父の後を継いで立派な漁師になりたいです。」

共通して述べられていることは、未来の田老や岩手の繁栄や進展などへの期待感、その実現に向けて大きなねがいや目標を持ち努力しようとする様、人生を前向きに一步一步進んでいこうとする様、震災体験を教訓として後世に繋げようとする

意志など、プラス感情に満ちた前向きな姿勢や強い意志であることが理解できる。

これまでの「渋柿」と「甘柿」それらをつなぐ役割を持つ「つぎ木」の関係性を図1で示し、「つぎ木」の内容について考察する。

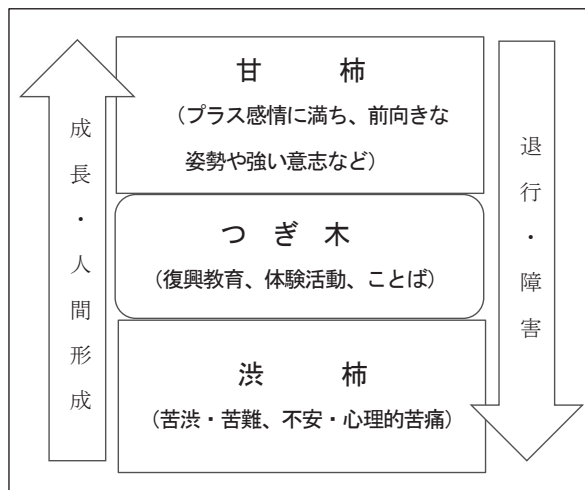


図1 甘柿、つぎ木、渋柿の関係

最初に、岡のことば「ただ育てるだけなら渋柿の芽になってしまって甘柿の芽の発育はおさえられてしまう。」について考えたい。

このことばは、「教育（人を育てる）」とは、渋柿を渋柿に留めておくことではなく、甘柿にする営みであり、そのためにはつぎ木を仲介させ、その役割を持つ教育をしっかりと機能させていかなければならない」ということを示唆している。

田老の子ども達は、震災後に直面した悲しみ、不安や恐れ、苦渋、苦難など、計り知れない「渋柿」に相当する経験をした。各人が遭遇した状況は様々ではあるが、家族や学校のこと、将来の自分や家族の在り方に対する不安や心理的苦痛は極めて大きなものだったに違いない。

そのような現実を持つ子ども達を学校教育は放置することはできなかった。そのため、震災直後から、心のケアを本気になって取り組んだ。心のケアは県全体で進めており、震災直後から今日まで、学校経営上の重点項目となっている。

しかし、心のケアのみに学校経営の重点を置くことが、渋柿を甘柿にするものとは言えないだろう。

大切なことは、心のケアと並行し、「つぎ木」

としての役割を持つ復興教育を、学校力を結集させ総合的に展開していくことだ。「つぎ木」としての復興教育は、いわての教育の要を成すものだからである。

したがって、子どもに対する成長ねがいを基盤にし、教育課程の中に復興教育を意図的・計画的、系統的に位置づけながら、総合的に学校経営を進めていく必要がある。そして、渋柿を甘柿に変容させる復興教育の「つぎ木」としての機能を発揮させ、期待する子ども像に近づくことができるのではないかと考えたい。

なお、図1で示した「退行・障害」は、心のケアや復興教育が脆弱に終わることで生じる危惧である。

3. つぎ木にあたる田老一中の復興教育

表1のように、2年間の学校経営方針を打ち立て、具体的な復興教育を進めていった。渋柿を味わった子ども達を甘柿にまで導き、田老や岩手の発展に寄与できるような成長や人間形成を大きなねがいとした。

平成23年度の学校経営方針

- 1 生徒や家庭の生活現実を十分に理解し、教育活動やPTA活動行うこと。
- 2 田老や岩手の復興のため、明るい未来を展望し努力することができる生徒を育成すること。

平成24年度の学校経営方針

- 1 「震災の記録と発信」
- 2 「命の教育活動」

表1 平成23年度と24年度の学校経営方針

3.1 つぎ木にあたる体験活動

災害文化研究第5号や2021ぼうさいこくたいでは、いくつかの復興教育の具体的な例を示した。再掲するが、写真2は、平成24年月9月18日に、1学年が、宮古地区（磯鶏）の災害廃棄物破碎・選別作業を見学した時の写真である。



写真2 災害廃棄物破碎・選別作業を見学(筆者撮影)

災害文化研究第5号では、「眼前で破碎され選別されている作業の現実を真剣な眼差しで見て、生徒各々の胸に焼き付いたおもいは計り知れない。」と記述した。

渋柿から甘柿へと繋ぐ役割を持つ「つぎ木」にあたる期間は、子ども達一人ひとりのものあり、決して横から割り行って詮索しようとしてはならないが、子ども達の心情は次のようなものだったと想像することができる。

子ども達は、過去を振り返り現実を直視し、未来を描くために、多くの時間を割いたと思う。そして、亡くなった人たちへの慰霊をするとともに、自分自身の進路について、心の中でそっと決意する場面が何度もあったのではないだろうか。

また、「いきる」「かかわる」「そなえる」に係る復興教育の授業を受ける度に、いのちの大切さについて深く考えたと思う。特に、大きな震災に遭遇した場合、どのようにして自他のいのちを支え守ったらよいのか、時間を忘れるほど考えたと思う。

そして、長い間悩み熟考した末、何度か遭遇する場面がなによりも大切であるが、ある日突然、どの生徒にも明るい道筋が目の前に現れる瞬間が訪れたのではないか。

それは、渋柿から甘柿に転換する場面や瞬間であり、人生を左右する力や子ども達に働きかけ開眼させる大きな力である。

災害廃棄物破碎・選別作業見学において、子ども達は、山積みされた品々は亡くなった人々の遺物であるかもしれないと考えたり、震災前に日常

的に使っていた思い出の品々であるかもしれないと考えたりしたはずだ。そして、震災前の生活と未来の生活とが入り混じった感情の中にあっても、何かを心の中でそっと決意したはずだ。

3.2 つぎ木にあたることば

津波体験作文集「いのち」にも、新たな決意をする上で契機となった体験、人やことば（言葉、詞）との出会いが多数記述されている。

ここで、二人の生徒の「わたしの主張」大会での発表文を紹介する。まず、消防士となった生徒の発表文を紹介する。「生きている人がいるかもしれないと、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた。僕はがれきの中を歩きながら思ったことが二つある。一つは「命でんでんこ」という言葉の深い意味。（中略）もう一つは、負けたくないと思ったことです。（中略）僕はあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思いたい。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。」

次に、祖父の跡を継ぎ、潜士となった生徒の発表内容を紹介する。「潜士になろうかな、と母にうちあげた時、母は祖母の話を始めました。祖父は摂待の海で生きる漁師だったこと。漁に出て亡くなったこと。その時母が小学生だったこと。そして、祖父の遺体を潜士の方が見つけてくださったこと。（中略）母から聞いた祖父のこと、仕事をしている父のこと、今、僕は父のような潜士になりたいと強く思います。（中略）復興のためになにかする。僕の未来も海へと続く。」

これらの発表文に綴れているつぎ木の役割を持つものは、人生の転機となるような体験である。

また、進路選択に対し決定的な影響をもたらすような人と人とのかかわり、ことばとの出会いもつぎ木の役割をもっていることが理解できる。そして、それらは、復興教育を推進していく際、大切にしなければならぬ視点を示唆している。

3.3 筆者が抱いているつぎ木とは

私自身も学校経営を進めていく様々な場面で、悩んだことが数多くある。

例えば、「生徒や教職員の状況把握と心のケアの在り方」、「修学旅行や体育祭の実施の有無」、「作文集の教育的な価値と作成」、「PTA 活動の在り方」、「基礎学力の定着と進路選択」、「想定外の生徒指導事案」など枚挙に暇がない状況にあった。

特に、作文集「いのち」の作成に関しては丁寧且つ計画的に進めていったが、常に頭をもたげたのは、本当に作成しているのかというものだ。作成の意義があるのかどうか、作成中あるいは作成したことによって震災のことを思い出させ、精神的な苦痛をもたらせば、つぎ木どころではなく、渋柿が渋柿のままに終わり復興教育に傷を作りがねない、そして全てが終わるのではないか、そう思い悩んだことが幾度もあった。

そのような時に、荒谷アイさん（2017 年 1 月ご逝去）から「作文は、いつか役に立つ」とのメッセージをいただいたことは、思いを新たにできた大きな転機であり、学校経営を前向きに進ませてくれたつぎ木の力となったことは言うまでもない。荒谷アイさんからいただいたことばは、生涯忘れない。このことばによって、救われたからだ。

また、震災時から田老一中から異動するまでの在籍期間中、大きな心の支えとして作用したことを吐露したい。あれから 11 年が経過した今だから述べる。それは、父の死亡についてである。

一人暮らしをしていた父は、津波で流され亡くなった。3 月 31 日に大船渡市立第一中学校の体育館で亡骸と対面した。死因は溺死であったが、顔も身体もきれいなままで見つけてもらった。家は全壊であった。生まれ故郷には、何も残らなかったという消失感を初めて体験した。しかし、悲しみに浸ってはいられなかった。翌日からは田老一中での新しい年度が始まるからだ。父親の死を無駄にせず、この体験を学校経営に生かしながら教育を進めていきたいと決意した。そのように誓うことが父への慰霊であり、悲嘆にくれる自分自身を救済するのではないかと考える日々が、こ

の瞬間からスタートした。

筆者にとっての「つぎ木」は、身近な人たちからの言葉、様々なご支援ご指導、そして父親の死である。

4. 成長や人間形成をもたらすことば（言葉、詞）の価値

笹原（復元納棺師）は、「言葉に出すことで、人は心の整理ができます。言葉には、そういう力があります。」と述べている。「おもかげ復元師」という書籍にあることばの一つである。ことば（言葉、詞）が持っている力、それを伝えるという行為の価値について、改めて認識することができ、胸に迫ってくるものがある。なお、この書籍は、いのちの大切さや人間の尊厳について多くのことを教えてくれる良書であり子ども達に推薦したい。

復興教育を進める上で、ことば（言葉、詞）を大切に活動を行うことが重要である。それは、復興教育において、3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てることとことば（言葉、詞）の力を育てることは相互に影響し合うものであると思うからだ。そして、ことば（言葉、詞）の意味を考えさせることによって、ことばを生き方や在り方に活かす力とすることが大切であると考ええる。

次の節では、作文集「いのち」を振り返り、さらに、ことば（言葉、詞）が持つ力について深掘りする。

4.1 作文集「いのち」の価値を再考する

まず、津波体験作文集の教育的な価値を振り返る。次に、池田（哲学者）のことばをもとに、作文集の価値について深掘りしたい。

2021 ぼうさいこくたいで、作文集の教育的価値について、下記の 6 点を提示した。

- (1) 震災の風化を阻止していく原動力
- (2) 人生を前向きに歩んでいく力の育成
- (3) 「自分の命をしっかりと守ること、他の人の

命を支え守ることの大切さ」を伝えること

- (4) 田老の未来の姿を語り復興への夢を描くこと
- (5) 利他の精神を形にしたボランティア活動を行う等、多種多様な震災関連の教育活動の紹介
- (6) 震災で得た学びや教訓を後世に伝え、もしも、津波に流され、無常の雪に埋もれ、尊い人を亡くした人たちがいたならば、その悲しみを胸に刻みつつ、その人のために自分はどう生きるべきかを考え、その人のためにも生きる決意を強くし、希望を持って前向きに生きるための指針

以上の内容は、子ども達に対する期待像や身に付けてほしい力をまとめたものである。なお、災害文化研究第5号には、作文集を完成させる上での経営方針を説明した資料を示してあるので、参照してほしい。

津波体験作文集「いのち」の作成のねがいやねらいは他にもあると感じているが、「風化によって、同じような悲劇を生むとすれば、震災の教訓や学びを記録し発信することの意義は極めて大きい」という強いおもいを持ち、震災の現実、教訓や学びを後世に伝えるためには、「震災の記録と発信」（平成24年度学校経営方針）を目的とした教育活動が大切であることを力説した。

4.2 池田晶子のことばを考える

池田のことばを紹介する。それは、「死の床にある人、絶望の底にある人を救うことができるのは、医療ではなくて言葉である。宗教でもなくて、言葉である。」というものである。

このことばを知った時の衝撃はとても大きかった。終焉を迎えようとしている人、生死の間をさまよっている人、絶望の極地にいる人に遭遇した時、その人たちを救うことができるのは、手術や新薬などの医療手段や宗教ではなく言葉である、ということだ。

この池田のことばの価値について、若松は次のように述べている。「コトバは生きている。あるときコトバは、眼前の他者よりもはっきりとした姿をまとして、私たちの前に顕れる。コトバの

もっとも重要な働きは救済である、と彼女は感じていた。コトバは人を救わずにはいられない、それが、彼女の経験したコトバの本性だといっている。」

若松の「ことば（言葉、詞）が持つとても重要な働きの一つに救済がある」という説明に対して、一点疑う余地はない。このことについて、筆者の考えを次に述べる。

4.3 ことばは、誰を「救済」するのか

臨終を向けようとしている人が目の当たりにいる時、どのようなことばをかけるべきなのか。その時間を逸してしまえば後悔するだろう。だから、この時ばかりにことばを吟味し、気持ちを込めて伝えるはずだ。失意のどん底にいる友人や肉親を目の前にした場合はどうだろうか。ただ寄り添っていくことの方が良い場合もあるが、あえて言葉をかけ、相手が立ち直ってくれたならば、ことばの力を認識し、伝えたことについての意義を見出すだろう。既に亡くなった人に対してはどうだろうか。この場合、辺りをはばかりことなく、いつでも死者の魂へことばを届けることができる。そして、亡くなった人を引き寄せ、慰霊することはもちろんのこと、心の底で抱えている今の心境や未来への決意を伝えていくことができるであろう。

作文集「いのち」の中に、震災で母と姉を亡くした生徒が母親のことばを振り返り、将来の歩む道を力強く決意した作文がある。断片的ではあるが、紹介したい。「自分は何がしたいのだろうかと考えたときに、ふと母の言葉を思い出しました。英語が好きなら、英語にかかわる職業に就くのがいいんじゃないの。」「英語をもっと勉強しよう」と決心しました。まずは英語検定取得に向けて勉強し、三級に合格しました。英語にかかわる職業に就くために、できることは全て挑戦したいです。」「あの時お母さんのあの一言があったから今こうしていろいろなことに挑戦したり頑張ることができるんだよ。これからも頑張るから見守っていてね。お母さん。」

この作文の冒頭が「お母さん、今度はね英語の暗唱大会に出場することにしたんだよ。頑張るからね。」で始めているのが印象的だ。亡くなった母親に対し、目の前に母親がいるかのように語り始めている。

将来の進路がなかなか見定まらなかった時期にあたり、愛する母親を震災で亡くし父子家庭となったこの生徒は、母親のことばを思い出し、書くことを通して自分の決意を伝えた。

「救済」とは、誰をどのように救うことなのか。そして、人が悩んだり苦しんだりしている最中、ことばを通して救うこととは、いったいどのような意味を持っているのだろうか。

亡き母親が残した数々のことばが、生徒を救済したことは間違いのない事実である。また、母親のことばを思い出す度に、母親と向き合い語りかけ、慰霊したことも疑う余地はない。

この生徒は、作文集「いのち」を何度も読み返すことがあるだろう。その都度、作文に綴ったことばを一つ一つ振り返り、今は亡き母親に対し感謝と新たな決意を伝えるのではないだろうか。

そのような慰霊や静謐な時間が流れる中、母親と生徒の間でかわされることばは、新たな生きる力を生み出す。そして、いのちを救済する力に繋がっていくはずだ。

4.4 自分の言葉で書くことばの力

池田や若松は、ことばが救済するという働きを持っていることを教えてくれた。また、若松は別の書物で書くことの意義について示唆している。次の内容である。「学校に行きたくない、職場にいくのがいやだ、他の誰とも会いたくない、と感じることは誰にだってあります。そういうとき、誰も励ましてくれないのであれば、自分で自分を励ますしかありません。もう一步踏み込めば、もっとたしかに自分を励ますことができるのは自分だといえるかもしれません。このとき、私たちが支えてくれるのは言葉です。それは、読んだ言葉である場合もあります。しかし、書いた言葉の方がよりたしかに強く自分を支えてくれます。」

身近な人や本のことば（言葉、詞）から希望や勇気をもたらすことがある。しかし、若松は、自分自身を励まし支えてくれる存在は、他者からのことばよりも自分自身が「書いたことば」の方に優位性がある、と指摘している。

震災を振り返る時、図1で示した「退行・障害」が生じる可能性も時にはあるだろう。しかし、適切に心のケアを実施しながら学校力を挙げて復興教育を実践している中、ことばを大切にした教育活動の実施上の時宜を得ることができれば、自分自身が綴る「ことばの力」を引き出すことができるのではないかと思う。

4.5 田老一中「校歌」にみる詞の力

2021 ほうさいこくたいでは、田老一中の校歌について紹介した。

田老第一中学校の校歌の3番には、防浪堤と津波という詞が校歌に謳われている。「防浪堤を仰ぎ見よ 試練の津波 幾たびぞ 乗り越えたてしわが郷土 父祖の偉業や 跡つがん」津波の歴史や受け継がれてきた教訓が学校教育、地域防災にも影響を与えている校歌である。なぜ生徒たちが津波の被害に遭っても、悲しみを力にし、協働しながら前を向き、復興のために活動することができたのか、その根底をなすものを、この校歌にみることができる。

また、災害文化とは一朝一夕で形成されるものではなく、歴史を踏まえ、学校と地域が一体となって災害の教訓や学びを継承し、守っていくことが極めて大切である、ということも教えている校歌ではないだろうか。

ことば（言葉、詞）には力がある。そして、この校歌の詞が、生徒を強くした。何度も何度もこの校歌を皆で合唱する度に、田老に生まれたことの運命を受け入れ、防浪堤の存在に畏敬を払い、郷土の津波史や偉人の業績を学びながら、強くたくましい自己を形成してきたと思う。

5. 今後の課題

これからの学校教育の中で、「自分のいのちを守る力、他の人のいのちを支え守る力の育成」及び「いのちの教育」を主軸に置いた教育を積極的に進めてほしい。また、あらゆる教育活動において、人と人とのかかわり、学校と地域とのかかわりや交流、連携を大切にしてほしい。

そして、子どもの成長や人間形成上の一つの側面として、大きな悲しみに遭っても、それを力にすることができるたくましい人間をつくっていくために教育の力を高めてほしいと感じている。

「つぎ木」としての復興教育を進めていく時に、ことば（言葉、詞）を大切にしたい教育活動を実践してほしい。ことばは、希望へ導き、人を救済する力を持つからである。また、ことばは、他者から得ることば、自分が綴ったことばの別はあるものの、どちらのことばからも生きる力を得ることができると思うからだ。

しかし、復興教育の行く末、ことば（言葉、詞）を扱う教育活動の在り方など、今後の課題は残る。

復興教育に関わっては、各学校における自己評価を行っていくことを求めたい。

2022年3月11日、あの日から11年目を迎えるが、各学校では「いきる」「かかわる」「そなえる」の教育的な価値を形にした復興教育がしっかりと実践されているだろうか。復興教育が矮小化され遠い存在となり、3つの価値がバランスを欠いたものになっていないかを自己評価する必要はないだろうか。

6. おわりに

田老の子ども達は震災における「渋柿」を味わった。しかし、不安や苦悩に満ちた生活状況下にあっても、全ての生徒は、「渋柿」に留まることなく、「甘柿」にあたる前向きで明るい人生を希求し、力強い社会を作りたいという気持ちを持ち続けた。そして、当時の生徒達は、一人一人が選んだ未来ある道で大いに活躍をしている。

今後とも、田老と田老の子どもたちの輝く未来を刮目していきたい。

引用文献

- 池田晶子（2003）：『あたりまえなことばかり』トランスビュー，p9
岩手県教育委員会（2019）：『いわての復興教育』プログラム第3版』
岡潔（2006）：『春宵十話』光文社文庫，p12
笹原留似子（2015）：『おもかげ復元師』ポプラ文庫，p82
若松英輔（2020）：『不滅の哲学 池田晶子』亜紀書房，p7
若松英輔（2019）：『詩を書くってどんなこと？』平凡社，p81
山崎友子編（2013）：『いのち 宮古市立田老第一中学校津波体験作文集』，岩手大学地域防災研究センター

参考文献

- 若松英輔（2019）：『悲しみの流儀』文春文庫
若松英輔（2020）：『読書のちから』亜紀書房

（震災時宮古市立田老第一中学校校長）